

みんなであそぶ民放史

テレビ創設期技術陣の苦勞（後編）

栗田 富士男（NTV）

あった。前号で触れたNHK砧の技術研究所でさえ、一世代前のアイコノスコープという撮像管カメラしかなかったのである。

我々は急遽、RCA社に、同社の総代理店大倉商事を通じて放送設備発注作業にとりかかったのはいうまでもない。しかし、問題は、はじめに予算ありきなのである。機材輸入として大蔵省から許された外貨は五〇万ドルばかりだった。我々はこれを送信機・アンテナに二〇万ドル、演奏設備一式（生カメラ五台）に三〇万ドルをあてた。当時は一ドル三六〇円の固定相場だったが、運賃関税を含めると約五〇〇円、総額二億五千万円の買物である。今にして思えば、随分みみっちいように見えなくもないのだが、その年の国家予算も一兆円に満たなかったことを思えば贅沢はいえない。

放送局建設の敷地は、第一条件として、人口分布の中心に送信所を置くのがテレビの常道であると前年米国の権威に教えられてい



千代田区二番町の社屋建設予定地

開局への足どり

当時テレビ技術の最先端は、イメージ・オルシコン撮像管（IO管）生カメラと10キロワット以上の大電力送信機に代表されていたが、両者とも日本では生産はおろか、輸入の現物さえ見た者がいない程のまぼろしの存在で

た。旧陸軍士官学校跡地（当時、パーシングハイツとして米軍が使っていた）が国有地で、価格的にも安価に取得出来そうだったということで、当初から、GHQ、外務省、国税局等に払下げ交渉をしたのだが、如何せん敗戦国の悲哀か、目的は叶えられなかった。（十年後NHKは代々木ワシントンハイツを取得）

代替策として有楽町読売別館（現そごうデパート）に本社・演奏所スタジオを置き、都内で最も海拔高を得られる地点を探し歩いた末、麹町に焼け跡の空き地（旧満鉄総裁邸）を見つけ、ここに送信鉄塔を建てる計画で申請書に記載した。しかしその後、読売別館は修復の焼けビルであるため、テレビスタジオとしては将来の増設が全く不可能と判明したので、有楽町を断念して本社、演奏所、送信所すべてを麹町に建設することにした。

有楽町に固執したのは、朝日、毎日、読売の新聞三社がここに集まっていた。加えて、前年開局したラジオ東京のスタジオも毎日会館にあった戦前のプラネタリウム・ドームを改装して使っており、いかなればマスコミの中心であったからである。しかし、やはりなんといっても、まだまだ戦争の傷痕が深く残っており、日本中が貧しくて新聞も放送も焼けビルの補修改装程度で計画せざるを得なかったのである。

民放に先をこされたNHKは、急遽法令の手続きを経て、昭和27年12月26日予備免許を取得、大急ぎで砧技研の実験局送信機を5キロワットに増力して内幸町本館に移設し、

28年8月20日、試験電波の発射に成功



翌28年2月1日開局、なんとかテレビ放送第一号の面目をたもった。

NHKも送信機は我々と同じRCAに注文したが、カメラについては例のメガ問題にこだわりのあったのか、英国のPYE社のものを採用し、これを標準方式用に改造して使用していたようである(トランス、整流器を外付BOXにしてケーブルで接続)。

我々は前述のように商用電源を60ヘルツに変換するCV-CF装置を設けたので、全く支障はなかったが、後に機器増設の度に電源容量への配慮が不可欠となる不便があった。

すべて輸入機材に頼ったといっても、現在のように各部門専門の工事会社があるわけではなく、ほとんど我々素人集団の手で設営しなければならなかった。そのうえ、RCAでもハイバンドの空冷式送信機はまだ実績がなかったため工場出荷が大幅に遅れ、受取は6月末にずれ込み、当初の4月開局予定はとうとう8月28日になってしまった。

四ヶ月おくれで漸く開局

7月半ば、前述の送信機とアンテナ系を除いて、やっとのことでスタジオ部分の設営を終えたので、いよいよ本格的番組制作のリハーサルに取りかかることになった。しかし本邦初演のことばかりで、お手本が全くなかったことが最大の苦勞ではなかっただろうか。

一足先に開局したNHKのやり方を勉強しておくべきだったのだが、建設の真っ最中であつてもそんな暇はなかった。その間、私の

記憶に残るブラウン管の映像は英国女王陛下の戴冠式に天皇陛下の名代として列席される「皇太子殿下横濱港プレジデント・ウィルソン号でご出発」の実況中継と、五月場所大相撲のワンカットだけである。

与えられたテーマが「技術の苦勞」となっているが、すべてが生本番だったので、番組を放送するのにサブコンだけでなくマスター、テレシネ、場合によってはマイクロ中継機を担当する送信機室まで全部が働くという具合で、逐一苦勞話としては枚挙にいとまがない。そこで最後に私の担当した中継の苦勞話をして本稿を終わらせていただくことにする。

開局当初アメリカの番組制作情報として聞いたのは、バラエティショー形式のものと映画フィルムの放映時間が大きな比重を占めていることだった。日本では本格的テレビドラマなどまだ作れなかったが、スタジオものはリハーサルに一時間かけて最大三〇分の番組が出来れば上々であるし、劇場映画はテレビの誕生を歓迎していなかった。いきおい安上がりで街頭テレビ向き(視聴率と言いたい所だがそんなものはまだない)且つ時間が稼げる、三拍子揃った番組ということで中継制作への要求はかなり強烈で、多い時は一日に三ヶ所の中継をこなしたこともあった。

中継車を臨時副調に

中継車は中継番組制作のため絶対必要だったが、当時「自動車」は輸入禁止の筆頭品目



テレビ中継車の陸上げ（横浜港）

であったので通産省にお百度を踏んでやっと手に入れた宝物であった。映像音声は勿論、コミュニケーションラインの配線等万全の装備が整っているものと信じていたのだが、実物は案に相違して今思えば大型のキャンピングカーを改造しただけのものだった。テレビ中継用の特別装備と見られるものは、30メートルのカメラケーブル巻取りドラム四基と当時まだ珍しかったウインド型クーラーの他、前半分はカメラコン操作卓とモニター棚が取付いてあり、後半はカメラ三台その他の専用棚になっていてにすぎなかった。私は開局を目前に大急ぎで、これをコックピットのように「動くサブコントロール」として作り上げることに没頭した。しかし困ったことにNHKの様子を見学していたディレクター達は、こ



手造りの中継車内部

の中継車を全く信用しないのである。彼らの言い分は「野球場では九人の野手、打者、審判、監督、コーチ、控えの選手そして観衆の動き全てが被写体なのだ。カメラが撮った二つか三つの小さな画をただ切り替えるだけで番組ができるわけがない。NHKのディレクターは、球場全体が見通せる所に座ってカメラにキューを出している。相撲しかり舞台しかりだ」。言われてみれば至極もつとも、神宮球場、蔵前国技館ではそうやっていたし、日比谷公会堂も下手照明室を空けて専用のテレビ室を作り、中には木製の操作卓が鎮座していたのを見た記憶がある。

私はこの要求に抗し切れずやむなく、わが

社の看板番組である後楽園球場の中継に限りて機材を持ち込むことにした。

8月25日総合リハーサル決行、昼過ぎから社員総出で機材運搬をして、一塁側内野席後列に臨時副調整室を特設し夜の公式戦に備えた。その日のカードは何だったのか覚えていない。ただ夢中で試合を追っているうちに9回裏が来たらしい。機材を撤収して社に帰りついたのは午前二時過ぎだった。全員綿のように疲れてそこに倒れてしまった。

これではとても開局を迎えられないと、ディレクター達も「臨時副調整室設置要求論」を取り下げてくれたので、この方式は最初にして最後のものになった。

あれから半世紀、マラソン、駅伝、ゴルフトーナメント等ビッグイベントになると中継車単位では処理できないので、ブレハブの「特設副調整室」を設営するのが当たり前になっている映像を見かけるが、老兵は「昔の仕事には魂が入ってた!」と心ひそかに自らを慰めている。

中継車輸入で税関を説得

中継車が所謂「自動車」の範疇に入れられ、輸入に手こずった話は前に触れたが、RCAからの輸入、通関業務を一手に引き受けていた私にとって、今でも忘れることが出来ない税関とのやり取りの思い出がある。それはテレビシネの主要設備フィルム・プロジェクター通関のことだった。書類にFilm Projectorとなっているので、税関は鬼の首をとったよう

後楽園球場に急造した調整卓



に、映画館に置く遊興機器（税率表にこうなっているか定かではないが）の項目に入れ、贅沢品として50%課税だと主張するのだ。こちらは通信機器のうち品名明記のない「その他」を適用して20%で通したい。そこで習い覚えたばかりのテレビ技術講釈を始めた。

「確かにプロジェクトと書いてあるが、映画館のものは全く構造が違っている。映画は万国共通で毎秒24コマと決まっているが、テレビはこれを毎秒30枚の画像に重ね直さねばならない。この機械はいうなれば『打ち出の小槌』なのだ」と。しかし天下の大蔵省税関がこんな説明で引き下がるわけはなかった。私は紙に

$$(2/60 + 3/60) \times 12 = 60/60 = 1$$

という算術式を書いて「奇数

コマと偶数コマではフィルムの停止時間が違い、その割合は2対3になっている。この機械はテレビ用の特殊機械で映画館ではつかえない」と30歳前の若造がしたり顔で、2・3プルダウン方式の開陳におよんだ。数式が功を奏したのか、税関も理解してくれて高額の新税は免れたが、実は私も初めて見た機械で、今思いだしても全く冷汗ものである。

しかし、このことは最初に述べたがNTSCとPAL方式に密接な関係を持つっており、単に方式の違いと片づけることは出来ない。因みに欧州ではこの「からくり」が使えないため、テレビの映画放映は25コマで放送している筈である。ということは映画の一時間ものはPALでは三分半ほど早く終わってしまう勘定になり、民放はスポットCMのことを考えると馬鹿にできない数字である。



本邦初演のプロゴルフ中継（32年10月）

現役を退いて十五年にもなり、その間の技術革新はより激しく、かつて数億円といわれたNTSC-PAL-SECAM方式変換器も、秋葉原で僅か数万円で入手できるご時世だ。欧州でも今は正規の24コマ放映に切り替えているかもしれないが、フィルム自体がテレビに登場する機会が少なくなった昨今、何事にも保守的な欧州がそのためにテレビネ機器を取り替える筈はないと思っている。十年ほど前に日本がミューズ方式ハイビジョンを世界の標準方式にしようと、欧州に売り込みに行ったが、賛意を得られなかったことと無関係ではなさそうだ。この辺りの実情がどうなっているのか、機会があれば専門家に聞いてみたい。

（写真の一部は日本テレビ放送網「大衆とともに25年」より転載）